

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代(6)

遠田雄志 / 小川 格*

目次

はじめに

I. 組織としての江戸時代

1. 組織の常識

1.1 鎖国

1.2 米本位制

1.3 参勤交代

1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)

2. 成長ゆえの衰退

2.1 武士が武器を独占した社会

2.2 家康を支えた譜代家臣団

2.3 徳川幕府の金、物、人

2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折
(以上第47巻1号)

3. 変化の気づきと互解

3.1 海外事情

3.2 田沼意次

3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)

4. 常識の更新

4.1 尊皇攘夷

4.2 志士という名のアジテーター

4.3 適塾と蘭学の行方

4.4 幕末そして維新のあけぼの
(以上47巻3号)

II. 江戸時代の春夏秋冬

1. 春

1.1 最後の戦争

1.2 改易と浪人の激増 (以上47巻4号)

1.3 将軍と天皇

1.4 鎖国への道のり (以上本号)

2. 夏

3. 秋

4. 冬

III. 江戸時代の意味するもの
おわりに

II. 江戸時代の春夏秋冬

1. 春

1.3 将軍と天皇

家康・秀忠・家光の徳川三代の将軍が、その治世約50年の間にその後200年以上続いた幕府の基礎を築いたことはよく知られている。ここでは、我々の「組織の適応モデル」の視点からこの幕府の基礎づくりがどのようになされ、どのような意味をもっていたかを再確認しておきたい。

まず、この期間に行われた、徳川幕府の基礎づくりの作業を整理しておこう。

1. 前政権を握っていた豊臣家を滅ぼし、徳川家の世襲による支配を確立した。
2. 秀吉恩顧の大名の力を弱め、改易、転・減封によって急増した浪人の抵抗を封じこんだ。
3. 日本の権力構造の頂点に君臨していた天皇の力を骨抜きにし、さらに幕府の下に押さえ込んだ。
4. キリスト教の布教、信仰を全面的に禁止し、鎖国体制を実現した。
5. 全国270の大名を確実に支配するため参勤交代を制度化した。

これだけスケールの大きな仕事は家康一人の手にあまるものであった。その作業は二代目秀

忠、さらに三代目家光へと引き継がれ、親、子、孫と三代の将軍によって見事に成しとげられた。驚くべきことだが、この時期に固められたこの構造はその後200年あまりにわたり基本的には変わることなく維持されたのである。

三代3人がその意志を確実に受け継ぎ、ついに新しい体制の基礎づくりという事業をなしとげた裏には、権力継承にさいして実に巧みな仕組みが働いていた。

それが大御所政治という二重権力構造であった。

3人の将軍の在位期間を見てみると、家康が2年間、秀忠が18年間、家光が28年間とかなり偏った配分になっている。しかし、将軍職を譲ってから大御所としてなお君臨した期間を含めると、家康13年、秀忠27年、家光28年とかなり平準化しており、ずいぶん印象が変わってくる。これには、家康11年間、秀忠9年間という長い大御所時代の存在を見逃すことができない。この期間は二重権力構造になっており、その間に先代から次代への意志と政治手法の伝達が行われたことが、政策の継続という視点から非常に重要であったと思われる。

また、この二重権力の期間に非常に重要な政策が実行されていることも注目したい。大坂冬の陣、夏の陣が家康の大御所時代に起こされており、紫衣（しえ）事件は秀忠の大御所時代に起こされている。こういう大きな政治決断は安定した政権基盤のうえに初めて行えるものであり、この三代の幕府権力がいかに安定していたかを証明するものでもある。この50年間は、幕府の歴史全体を通してみてもっとも安定した強力な権力を維持した時代であり、その上ではじめて上記のような、抵抗勢力に対する手荒い政治決断と軍事力を行使しえたのである。

上記の1と2はすでに論じたので、次に3の天皇との闘争について検討してみよう。

天皇権力との戦いは、3代を通じてきわめて重要な課題であり、3人がそれぞれ重要な働きをしているが、最後に家光が完成させたものである。

次に将軍と天皇との戦いあるいは駆け引きのプロセスで重要なものについて検討してみよう。

この闘争において、朝廷側で矢面に立ったのは後水尾（ごみずのお）天皇であった。この天皇の即位自体、後陽成（ごようぜい）天皇の意志に逆らって家康の意向によって決定されたものであったが、18年にわたるその在位期間中幕府から押しつけられた無理難題を一身に受け止めた。

主要な事件だけでも、「禁中並公家諸法度（きんちゅうならびにくげしよはつと）」「和子（まさこ）入内（じゅだい）」「紫衣事件」と、天皇の独自の権限を剥奪する幕府からの圧迫が続いたのである。「禁中並公家諸法度」が公布されたのは、秀忠が将軍の時代であったが、実権を握っていた大御所家康の手で進められた。家康が没すると秀忠によって「和子入内」が遂行され、さらに家光将軍の時代、大御所秀忠の手で「紫衣事件」が起こされている。こうして後水尾天皇は一人で3人の将軍からの圧迫と対峙した。こうした圧迫に対して後水尾天皇はどう対峙したのか、それを検討することは、江戸時代初期の朝幕関係を考えるうえできわめて重要である。

征夷大將軍と天皇

秀吉は、信長亡きあと光秀を討ち取ると、賤ヶ岳の合戦などを勝ち進み、ついにはじめて全国に統一した秩序をもたらし、実質的に日本の支配者になった。この段階で秀吉は自分の身分、つまり日本を支配する者としての正当性を証明する肩書きを必要とした。この時秀吉が求めたのは「関白」の地位であった。

これは歴代、天皇や公家たちが築き維持してきた朝廷の権力構造の中の最高位に自分を位置づけ、自己の権力を正当化しようとする意図によるものであった。天皇の下で天皇の権威を借りて自己の権力を正当化しようとしたのである。当然、秀吉は朝廷と親和的な関係を築こうとした。京都の中心部に絢爛豪華な「聚楽第（じゅらくだい）」を築いて、天皇の行幸をあおいだのもそのためであった。

ところが、豊臣家を倒し、統一権力を手中にした家康はこうした秀吉の手法にならわなかった。家康が求めたものは「関白」ではなく、

「征夷大將軍」であった。約400年前の1192年鎌倉に幕府を開いた源頼朝にならったのである。これにより武家の棟梁としての正当性を獲得しようとしたわけだ。

「征夷大將軍」は坂上田村麻呂以来、東國を平定する武人という性格が与えられている。また家康は権力の執行機関の名称も頼朝にならって「幕府」と称した。幕府とは武士が戦場で天幕を張って作る仮の小屋のことである。しかも家康は幕府を京都ではなく、遠く東の江戸に開いた。

これは、朝廷の外に武士の集団として権力を握って国土を外敵から守るという意志をことさらに宣言したものであり、朝廷と一体化しようとした秀吉とは大きく異なるスタンスをとったことになる。

しかし、この「征夷大將軍」の称号は天皇から与えられる。つまり形式としてはどう見ても天皇の下に位置づけられる地位である。にもかかわらず、天皇からこの称号を得ながら、家康は始めから天皇に対してきわめてそっけない高圧的な姿勢をとった。

江戸時代の徳川幕府は最高権力を獲得しながら、天皇を倒すことなく、形式としてはその下に自分を位置づけながらも現実には天皇の行動を法律によって制限し統制しようとした。ねじれた権力構造ははじめから埋め込まれていたのである。皮肉にもこれが後に自らに敵対する勢力に利用される所となるのである。すなわち幕末、尊王攘夷派は、理論的に幕府の上位にある天皇に着目し、天皇を取り込んでその権威を利用して幕府を追いつめたのである。二重権力構造は幕府の力が強い間は問題なかったが、弱まると不安定要因となる危険性を内包するものである。

後水尾天皇と東福門院和子

家康は、関ヶ原の合戦の後徳川の天下を確実なものとする、次に目を向けたのが天皇であった。

この時の天皇は後陽成（ごようぜい）天皇であったが、心身ともに弱く、譲位は時間の問題であった。家康はこの機会に朝廷から秀吉の影

響力を一掃したかった。そこで、継承順位が高くとも秀吉の息のかかっている兄たちを退け、後水尾天皇を押して即位させた。

さらに天皇家に徳川家から嫁を送り込みたい、徳川の血を受けた天皇を実現したいという驚くべき野望を抱いた。そうすれば、幕府と皇室の両方が徳川家のものとなると考えたのである。

1607年、二代將軍秀忠に第5女和子（まさこ）が生まれると、世間ではたちまち入内（じゅだい）の噂がたったというから、幕府はその前から入内を画策していたのであろう。和子が6歳になると朝廷と幕府の間で入内の交渉が始まり、衣装の相談などが行われている。8歳になると正式に入内の宣旨が発せられ、1618年になると、女御御殿の建築がはじまり、ついに1620年入内が実現した。

和子の入内の儀式は空前の大がかりなものであった。5月8日に江戸を出発した行列は28日京都の二条城に入った。供の人数は大名20名をはじめとして約5,000人に達した。

入内の儀は、6月18日、近隣諸国から詰めかけた物見高い群衆の中を二条城から御所へ向けて途方もない大行列をつくって進められた。嫁入り道具も膨大なもので、たとえば、長櫃160棹、屏風箱30、長櫃100棹等々、しかもことごとくが金銀で飾り立てた贅沢の限りを尽くしたものであった。

嫁入り道具の他に天皇と公家たちへのお土産がまた大変なものであった。この時、後水尾天皇は25歳、和子は14歳であった。

この入内を境として、朝廷は大きく変わった。贅沢になったのである。幕府から流れ込む金品が朝廷を潤したためであった。

和子は、朝幕間が緊張をはらんだ困難なこの時代に、半世紀以上天皇（後に院となる）に寄り添い、2人ともこの時代にしては例外的に長命で、陰ながらよく両者の仲介の役割をはたした。また和子は幕府から潤沢な金品の支援を引き出して朝廷を潤したのみならず、文化芸術活動のパトロンとして天皇（院）と朝廷を支え続けた。またその資金は京都の工芸文化活動を活性化し町の経済を潤した。幕府は譲位した後水尾院のために仙洞御所をつくり、和子のために

はそれを上回る規模の住まいをつくり、その後もたび重なる火災にもかかわらずそのつど御所を再建した。

第三代将軍家光とその妹和子は、朝幕間に最も平穏な時期を切り開いたが、それは幕府がすでに朝廷の保護者として朝廷の上に君臨した時代を意味していたのである。

紫衣事件と幕府の朝廷支配

位の高い僧侶や尼僧は紫色の法衣や袈裟を着る。これは紫衣（しえ）と言われるものであるが、着用できるのは、天皇からの勅許を受けたものに限られていた。天皇から勅許が出ると、寺院は謝礼を支払うことが慣習になっていた。寺院はこれによって権威を維持し、朝廷はこれによって潤った。これが京都の二大勢力、朝廷と寺院をつなぐ強力なパイプになっていた。この二大勢力は庶民の尊敬を集め、精神的な権力構造の頂点に君臨していた。

権力を握った家康にとってそれは見逃すことのできないものであった。このため、豊臣勢を滅ぼすと、ただちに朝廷と寺院への干渉を開始した。

幕府は1613年「勅許紫衣法度」を制定し、つづいて「公家衆法度」「禁中並公家諸法度」を制定し公布した。

「勅許紫衣法度」では、僧侶の最高の荣誉である紫衣を着ることが許される大徳寺、妙心寺、知恩院など七寺の住職に紫衣を勅許する時はあらかじめ幕府の承認を求めることが規定された。

また「禁中並公家諸法度」において、天皇と公家は学問にはげむこと、用もないのに町を徘徊しないこと、勝負事をしたり行儀の悪いサムライなどを抱えないこと、これらに違反するのは流罪に処すると規定された。

ここには天皇と公家の公的な権限から、日常の行動と生活までこと細かく規定し、全てにわたって幕府の指示、承認を要するとされ、これにより、天皇の権限は大幅に制限されたのである。

鎌倉時代から武家の政権は約400年続いてきたが、朝廷に対して、法律を作って統制するな

どということは、初めてのことであった。

にもかかわらず、後水尾天皇は従来の慣例にしたがって幕府に相談なしに僧侶への紫衣や上人号を与え続けた。これを知った三代将軍家光が、法度違反として、調査を命じたのは、法度の公布後14年たった1627年のことであった。結果として、法度制定から14年間、元和以降に与えた勅許状を全て一度に70～80枚を無効とした。天皇が一度与えた勅許を無効にされるなど、天皇としては我慢のならない屈辱であった。

そのため天皇は非常に憤慨し、大徳寺の住職や沢庵らも幕府に抗弁書を提出して抵抗した。

多くの僧侶、寺院はのちに幕府に謝罪し、許されたが、沢庵など強硬派は出羽などへ流罪となった。

これが、紫衣事件といわれるものであるが、京都の二大勢力、朝廷と寺院の間にくさびを打ち込むとともに、天皇の権限を大幅に制限、剥奪する行動によって幕府が朝廷より上位にあること、さらには将軍が天皇より上位にあることを世に示したものであった。この一連の事件を主導したのは、幕府の宗教政策を取り仕切っていた黒衣の宰相といわれた金地院崇伝（こんちいんすうでん）であった。

それに対して、後水尾天皇は大いに憤激し、ついに幕府に相談もなく突然譲位するという捨て身の行動にうってでた。天皇にとって譲位は幕府に対する最大限の抗議の行動であった。

この時、天皇の作った和歌が伝えられている。

葦原やしげらばしげれおのがまゝ

とても道ある世とは思はず

後水尾天皇の強い憤りと失意が実にストレートに表現されているではないか。

女帝誕生

和子が14歳で入内して3年後、いよいよ待望の出産を迎えた。しかし、幕府の切望もむなしく、産まれたのは女兒であった。和子はこのあと二人の男子を含む計7人を出産しているが、男子は2人とも幼くして早世してしまった。

後水尾天皇の突然の譲位に幕府が慌てたのは、和子に皇位を継ぐべき男子がまだなかったため

である。やむをえず奈良時代の称徳天皇以来860年ぶりという女帝を立てざるをえなかった。和子が産んだ7歳の女一宮（おんないちのみや）、明正（めいしょう）天皇の誕生であった。幕府にとっては待ちに待った血縁の天皇つまり将軍家光の姪であり、徳川家は念願の外戚の地位を得たのであるが、本意とは異なるものであった。幕府としては和子に男子出産の可能性がある以上、それまで後水尾天皇に譲位をせぬよう強く望んでいた。なぜならば女帝が婿を迎えることはできないので、いったん女帝を立ててしまうと、徳川の血統を天皇家に伝えることができなくなるからである。幕府の意向を無視された秀忠は怒りのあまり天皇を島流しにすべきだと叫んだ。これは家光のとりなしで収まったものの朝幕関係の緊張はいっきに高まったことは間違いない。幕府にとっては、こうして徳川の血を受けた女帝が誕生したわけだが、喜びと失望の相半ばするほろ苦い慶事であった。このため、明正天皇の即位の儀式に将軍家光が上洛することとはなかった。

将軍の上洛

戦国時代の大名は近隣諸国を倒して勝ち進むと最終的には京都を目指した。京を押さえれば、全国制覇をなしとげることができる。武田信玄も今川義元も織田信長もこうして京を目指した。

しかし、家康は全国制覇をなしとげながらも、京都に代わって江戸に幕府を開いた。このため、二代将軍秀忠、三代将軍家光は、天皇から征夷大將軍の宣旨を受けるために京都へ上洛する必要が生じた。諸大名を引きつれた大規模な上洛の行列は全国制覇を成し遂げた強大な軍勢力を誇示するパフォーマンスの役割も果たした。

もっとも、家康が将軍宣旨を受けたのは、まだ関ヶ原の合戦から日も浅く、家康が伏見城に滞陣している時であったから、伏見城で宣旨を受け、翌日身近な武将を引き連れてお礼の参内をするという、あっさりとしたものであった。これに対し、秀忠は将軍宣旨の受諾のために江戸から諸大名とその軍勢10万人という大軍を率いて上洛した。

将軍の上洛というテーマは徳川将軍と天皇との力関係を考えるうえでことのほか興味深いものである。そこで第三代将軍家光の上洛についてその意味を検討してみよう。

家光は27年間の将軍在位期間中、以下の通り三度の上洛を行なっている。

1. 1623年（元和9年）
2. 1626年（寛永3年）
3. 1634年（寛永11年）

この3度の上洛はそれぞれ目的も性格も異なっており、そこには将軍と天皇の力関係が明確に反映していた。

まず最初の上洛、1623年の上洛は家光への将軍宣下を受けるためのものであった。しかし、秀忠が将軍職を譲ったといってもまだ実権をにぎってこの後10年間実質的に権力を手放さなかったから、この上洛はあくまでも秀忠が主で家光は従であった。家光はこの時まで20歳であったが、将軍宣旨を受けたあと参内して、謝礼として天皇へ銀1,000枚、綿1,000把を献上している。

次に第2回目の上洛であるが、これは3年後の1626年に行われている。その目的は、秀忠が二条城において天皇の行幸を受けるためであった。秀吉の聚楽第行幸を超える大掛かりなイベントを開催し、将軍の強大さを天下に示すための一大イベントを行ないたいと考えたのだ。

このため、秀忠は全国の大名に上京を命じ、二条城も大規模に建設整備し、京の街を見下ろす天守閣もつくった。天皇が御所を出ることは例外であるが、後水尾天皇は二条城へ行幸しここで5日間をすごした。この間、連日にわたって舞楽、管弦、能楽などが行われ、日々酒宴が催された。この時に使われたすべての調度は金銀で作られており、秀忠から天皇に白銀3万両、御服200領が献上され、さらに公家門跡へは白銀11万6,000両が進物として献上された。将軍の力を誇示する一大デモンストレーションであった。つまり、2度目の上洛は大御所秀忠が天皇を組み敷いてその權威を天下に見せつけるためのものであった。

3回目の上洛が行われたのは、秀忠が死去して、将軍の実権が家光に移った翌年、つまり

「御代替の御上洛（みよがわりのごじょうらく）」であった。この時、家光は全国の各大名に軍役の半役をもって上洛の供を命じた。このため、将軍に供奉（ぐぶ）した武士は30万7,000人という関ヶ原の合戦や大坂の陣をこえる史上最大規模のものとなり、江戸から京都まで槍や鉄砲で武装した武士達の途切れることのないほどの大行列となった。この時の天皇は和子の子つまり家光の姪にあたる明正天皇であり、すでに天皇は将軍の身内であり、対抗すべき対象ではなく、支援し保護すべきものとなっていた。かつて対抗していた後水尾天皇は退位して後水尾院となり、家光は院の御料として7,000石を献じ、計1万石とした。

さらに上皇に対して、官位昇進などの朝政も上皇の気の済むようにされたい、として後水尾院の院政を承認した。この時代の家光の朝廷に対する姿勢がもっとも穏やかであった。

その上、京の町衆1,000人を招き、京中の全戸35,000戸に計銀5,000貫を下賜した。また、全国の大名を二条城に呼び領地朱印状を手渡した。

この上洛は空前絶後のスケール、しかも家光ごのみの派手な装束が人々を驚かした。徳川の富と武力をいやが上にも見せつける華やかなショーであった。

しかし、将軍の上洛は、これが最後となった。家光はこのあと16年にわたる在位期間中一度も上洛することなく、かわりに日光社参を5回行っており、あとの将軍たちもこれにならうことになった。これは将軍が崇拝する対象を天皇から日光東照宮に祀った権現様つまり家康へと変更したことを物語っている。幕府にとって、もはや自己を権威づけるために天皇は必要なくなったのである。次の将軍上洛は1863年、家光の上洛から229年後、幕末の激動のさなか、第14代将軍家茂（いえもち）のときであり、孝明天皇にできもしない攘夷を誓わされるという、天皇との力関係が逆転した瞬間であった。

それはともかく、開幕間もない頃数十万人の騎馬、槍、鉄砲で武装した軍勢を引き連れ、江戸から京都まで約15日ほどかけて行進する「上洛」の行列は、沿道の人目を引いたのみならず、その噂は全国に広がったに違いない。ひとびと

に時代が変わったことを周知徹底する教育という役割を担っていたのである（明治維新や太平洋戦争終戦直後の天皇の地方巡幸もこれに当たる）。

このように、将軍の上洛は組織の初期に新たな常識を周知徹底するために必要とされる教育というプログラムの典型的な手法と考えることができる。反対に幕末の上洛は幕府権力が衰え、将軍が天皇の下に従わざるをえなくなったことを表している。

後水尾天皇とサロン

退位した後水尾天皇は後水尾院となり、御所の中に幕府の用意した仙洞御所に移るとともに、幕府からの監視と束縛を離れ、比較的自由に学問芸術の道に楽しみを見つけていった。

仙洞御所はその後院の長い生涯の住まいとなり、院を中心とした学芸活動のサロンとなった。和歌、文学、立花、椿、茶の湯等、京都の内外から町人、僧侶を含む多彩な文化人を招いて幅広い交遊を楽しんだ。

ここでは、連歌、茶会、などの催しが連日のように行われたが、なかでも興味深いものに「立花」がある。室町時代の書院の飾りにすぎなかった生け花が二代池坊専好の登場により、独立した「立花」として、鑑賞に堪える芸術に成長したのである。その成長を支えたのが後水尾院が主催するサロンであった。

院は身分を超えて実力のあるものを集め、たとえば、1629年寛永6年には半年間に30回以上の立花の会を開いた。立花の会では、参加者がその場で生けた作品を前にして、院が池坊専好に順位を付けさせた。これを「点取り立花」と称し、参加者たちの競争心をあおり、技術を競わせた。

こうした立花の会は身分を超えて腕の立つものが呼ばれ、参加者が30人、40人に達することもあった。院はことのほか立花が好きで、「立花狂い」とまでいわれた。この時代に完成の域に達した立花は、生け花として今日まで続く日本を代表する芸術になっている。後水尾院のサロンがなければ、今日の華道もなかったのである。

この時代、茶の湯に活躍した千利休の孫千宗且や、作庭に天才的な腕の沓えを見せた小堀遠

州、書をはじめ万能の才人本阿彌光悦（ほんあみこうえつ）、町の絵師ながら光悦とコラボレートして優れた作品を生み出した画家俵屋宗達ら、今日から見ても飛び抜けた能力をもった芸術家が現れており、院のサロンを介して交遊を深めた。

光悦の家は代々刀剣のめきき、とぎ、ぬぐいを家業としてきたが、寛永の三筆といわれるほどの能書家であり、蒔絵（まきえ）、陶芸など何をやらせても名人の名に恥じない天才であった。刀剣を扱う仕事柄、武家とも親密なネットワークをもっており、家康も光悦を高く評価して、京都の北山、鷹ヶ峯の地を与え、光悦はここに一族とともに大勢のアーチストや工人を呼び集めて、芸術村を作り上げ、創作活動に取り組んだ。

光悦の作品としては、国宝になっている大胆な造形感覚を見せる「舟橋蒔絵硯箱」や、宗達の下図の上に伊勢物語や方丈記を流麗な筆致を木活字にして印刷した「嵯峨本」などがある。異業種の工人と協力して作品を生み出すアートディレクターとしての活躍が高く評価されている。

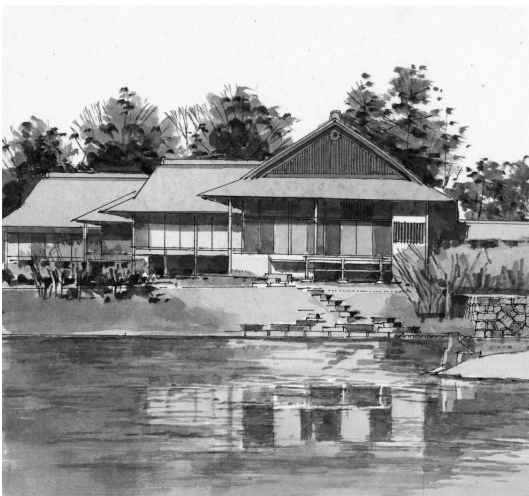
修学院離宮の造営

院はこうした人々の交遊の中心にいたが、院自身ももっとも力を入れたのは、山荘の造営であった。それが桂離宮とほとんど同時期に工事が進められた修学院離宮である。院は繰り返し

京都郊外を実地に調査し、比叡山の麓の地を選び、大規模な堰堤を築いて川をせき止め大きな池をつくり、島を浮かせ、橋を架けて、広大な人工の自然を作り上げたのははじめ、作庭に山荘の造営に励んだ。そこは、京都市街が一望のもとに眺められる景勝の地であり、数ある京都の庭園の中でも群を抜いた雄大なスケールの大きな庭園である。院は庭石をはじめ一木一草にいたるまで自分で構想し、自分の手で造ったと言われるほど作庭に熱中した。

後水尾院がこれほど大規模な離宮を造営することができたのは、東福門院和子が幕府から潤沢な資金を引き出して協力したからにほかならない。

修学院離宮は、桂離宮とともにこの時代の公家の文化を代表する庭園、建築の傑作である。これに対し同時代に武家の手になる庭園、建築を代表するものが二条城そして日光東照宮である。桂離宮、修学院離宮が平安貴族の王朝文化の簡素な自然と一体化した美しさの再興を目指したとすれば、これと対照的な二条城、日光東照宮は戦国武將をパトロンとした安土桃山文化を引き継ぎ、人工の極致とも言うべき過剰な装飾を追究した、武家の芸術作品である。両者は対照的であるが、江戸時代の美意識は決して武家の美意識のみに支配されたのではなく、修学院的なものも数寄屋建築などとして現代にまで、流れ込んでいる。



桂離宮



二条城

寛永文化の性格

これらの文化芸術活動を総称して寛永文化と呼び、江戸時代の武家が育てた江戸初期の新しい文化であると捉えることができる。しかし、その担い手や資金の出所、さらに王朝風の優雅な意匠からも、それを朝廷や京の町衆が支えた中世文化の最後の開花といった見方がある。そして、その中で育った芸術家や作品は、近世、江戸時代の文化の担い手にその芸を伝達していたことも確かである。

こうした文化の橋渡し役として見逃せないのが東福門院和子である。和子は72歳で没するまでの50年間、幕府の財政支援のおかげで豊かな趣味生活を楽しんだが、特に衣装狂いと言えるほど自由に贅沢に衣装を買い求めた。72歳、死の年、半年だけでも、御用呉服商「雁金屋」(かりがねや) に特上の衣装を今の金額にして合計1億五千万円分にもものぼる注文を出したといわれている。自分だけではなく、女官たちにも大らかに買い与えていたのであろう。

時代は元禄時代の入口までさしかかっていた。町人も競って「伊達(だて)くらべ」というファッションを競う風潮に染まってゆく時代、豪華な絹の衣装にふんだんにお金をつぎ込んだ。

このため、和子お気に入りの「雁金屋」は業界一の名門呉服商として全盛を誇り、その子供として、なに不自由なく育ったのが尾形光琳、乾山(けんざん)の兄弟であった。父親の死によって家産が傾いたのをきっかけに、二人は画家と陶芸家として自立した。光琳は俵屋宗達の作品に学び、きわめて装飾性の高い「燕子花(かきつばた)図屏風」や「紅白梅図屏風」という、日本美術を代表する傑作をはじめ優れた作品を残したが、さらに100年ほど後に酒井抱一(ほういつ)が出て光琳の作品に学んで大成し、いわゆる江戸琳派の大きな流れを作った。光琳・乾山は元禄時代、酒井抱一は文化文政時代を代表する芸術家であるが、そのみならず、日本を代表する芸術家として世界的にも高く評価されている。こうして、寛永文化の神髄は元禄文化へと流れ込み、いわゆる江戸文化の静かな底流として育ってゆくのである。

もっとも、江戸時代の美術の本流は、あくま

でも狩野派である。二条城の襖をはみ出して欄間まで突き出る雄渾な松や鷹の絵画は、狩野派の真骨頂を表しているが、将軍をはじめ、全国の大名の求めたものはこの狩野派だったのである。当然、全国の城や、大名屋敷は狩野派の松や鷹の作品で埋め尽くされ、従って全国津々浦々に狩野派の画家と作品は満ちあふれていた。彼らは御用絵師として、障壁画のほか、将軍や大名らの肖像画、屏風絵などの製作にたずさわった。狩野派こそ、武家の時代に相応しい美術だったのである。

しかし、今日の我々にとって、狩野派の作品はたいして興味を引くものではないが、琳派の作品は、現代のセンスに通じるものがあり、世界中から日本美術の代表として注目されている。

1.4 鎖国への道のり

江戸時代260年の国の性格を決定するうえで、徳川三代の下した判断とその政策はきわめて重要なものであるが、なかでも最も決定的な決断といえるものが「鎖国」である。

鎖国は徳川幕府の外交戦略であるが、その影響は単に外交にとどまらず、江戸時代の日本の進路や性格を決定づける総合的な政策であることが次第に明らかになってきた。しかし、この政策ほどその後今日に至るまで、我が国の国民性ひいては一人一人の性格形成にまで強い影を落とした政策はない。

もちろんこの鎖国という決断は一朝一夕に下されたものではない。

それは、西欧諸国との接触、つまり西洋文化の受容と拒絶の一世紀になんなんとする長い試行錯誤の歴史の末に到達した苦渋の決断だったのである。

ヨーロッパ側から見れば、ポルトガルとスペインによる東廻りと西廻りの世界発見競争の最終到達点が日本であり、その日本という新たな市場の争奪戦の結果が鎖国であった。さらにこの一世紀は大航海時代といわれているが、その間の闘争の末にオランダあるいはイギリスに覇権を握られたポルトガルとスペインが東アジアから敗退する歴史でもあった。

一方、日本にとってこの間は、ちょうど近世統一国家形成期の最終局面であり、鎖国は信長、秀吉、家康、さらに秀忠、家光と5人の支配者によって苦悩に満ちた闘争の末にようやく到達した決断であったのである。言い換えれば鎖国はヨーロッパ諸国の市場争奪戦に対して下した日本の回答であったと云うことができる。

その実態を一口でいえば、西洋文明を受容しながらも、彼らの価値観は排除したいというもので、それを象徴するのが、鉄砲の受容とキリスト教の禁止である。

それは、その後の江戸時代二百数十年を通して迷うことなく貫徹された原則であった。それが江戸時代の「組織の常識」として共有されたことはすでに本論文「I.1. 組織の常識」で検討した通りである。

鎖国と開国の相関図

西欧文明との接触は1543年のポルトガル船の種子島への漂着から始まった。そして、島原の乱のあと1641年、オランダ人の居住と交易の場を出島という小さな空間に限定した時点で最終局面を迎えた。この期間ほぼ1世紀に及ぶ行きつ、戻りつの試行錯誤の期間がここで検討すべき課題である。

この1世紀、鉄砲の伝来と普及、南蛮貿易による西洋文物の流入、キリスト教の急速な布教、キリシタン大名の誕生、少年使節団のバチカンへの派遣、伴天連追放、キリシタン弾圧と殉教、そして島原の乱と、主な事件を拾ってみただけでもいかに大きく歴史が動いたか目を見張るばかりである。それはまた南蛮屏風に描かれたきらびやかな世界から悲惨な殉教という両極端がない交ぜになった、めくるめくような時代であった。

この時代と好対照をなすのが、江戸時代260年が終わって、日本が再び西欧世界と接触した明治、大正、昭和、平成という、1868年の明治維新から1945年の第2次世界大戦の敗戦を経て今日までの100年あまりの歴史で体験した栄光と悲惨の歴史である。明治維新による開港、明治時代の欧化主義、その極まるところの鹿鳴館、そして昭和戦前の国粋主義、敗戦後のさらなる

西欧化そしてグローバリゼーション。まるで鎖国への歩みのフィルムを逆まわししているようではないか。

一般に、経時的に記述するこれまでの「歴史」においては、300年をへだてた2つの時代を比較することは難しい。

しかし、「組織の適応モデル」によれば、歴史を俯瞰することは容易となる。その結果、江戸時代を間に挟んだ前後二つの1世紀が見事に好対照をなしていることに改めて驚かされる。すなわち、先の時代は試行錯誤の末に鎖国によって西欧の価値観を遮断し、後のもう一つの時代は敗戦によって自国の価値観を放棄させられた。この二つの時代は、絶妙な好対照をなしている。そしてこの間に江戸時代という鎖国の平和な安定した時代が存在したことがわかる。

こうして全体を見るなら、これから検討しようとしている鎖国への道のりを単に江戸時代に限定してみても意味をなさないことは明らかであろう。その1世紀の半分は戦国・安土桃山時代に、後の半分は江戸時代に属する。そこで、鎖国への道のりを検討するためにここでは、次の三つのエポックと5人の為政者の政策を取りだしてみることにする。ここでは、5人の世界観、外交戦略が検討の対象になる。

- ① プレ江戸時代、すなわち、織田信長、豊臣秀吉による西欧文明の受容と拒絶の過程。
- ② 徳川家康の貿易政策に見る逡巡。
- ③ 徳川秀忠、家光による鎖国への道。

こうした問題意識から、徳川三代の政策決定の意味するものがより鮮明に見えてくるのではないか。

① プレ江戸時代

鎖国への道のりの1世紀を見渡してみて、あらためて驚かされるのが、偶然とはいえあまりにも鮮やかな歴史の大きな区切りの存在である。1600年という年がそれで、その年を境に時代がくっきり二つに分かれているのである。日本国内においては、この年関ヶ原の合戦が行われ、徳川家康の覇権が確立した。一方、西欧世界では、1588年にスペイン無敵艦隊がイギリスに敗北して勢いを失うと、1600年イギリス東インド

会社が設立され、続いて2年後、オランダも同じく東インド会社を設立し、ともにアジア進出への態勢を作り上げている。これを画期として、東洋からスペイン、ポルトガルの南欧勢力が次第に駆逐され、イギリス、オランダが東洋の海の覇権を握ることになるのである。

東西文化交流史の視点から見れば、1600年以前は、信長、秀吉と南蛮つまりスペイン、ポルトガルの関係が主軸となって展開した時代であり、1600年以降は家康、秀忠、家光の徳川三代将軍とイギリス、オランダ特にオランダとの関係が中心となった時代であったといえる。

スペイン、ポルトガルがキリスト教の布教と通商をからめて進めようとして貿易すら失って失敗したのに対し、イギリス、オランダは通商のみに限定して関係を維持しようとし、結局オランダがその後の対日貿易を独占したのである。

このように、東西交渉の1世紀の前半と後半では交渉相手も、その内容も大きく異なっていた。

後の歴史家はここを境にして、日本が中世から近世へと変わる時代の大きな結節点になったと評価している。

南蛮屏風と信長

この時代の沸騰する社会の一断面を鮮やかに見せてくれるものに「南蛮屏風」といわれるものが残されている。世界中の博物館に保存されているものを含めて、総数が90点にのぼる。ここには、当時の南蛮人カピタンや宣教師たちと交流する商人や武士たちの様子が鮮やかに描かれているが、共通するパターンがある。左半分には万里の波頭を乗り越えて到達した黒い大きな南蛮船が帆を大きく膨らませて停泊し、そこからいろいろな積み荷を運び出す多くの小舟が描かれている。右半分には港が描かれており、上陸した南蛮人、大きな笠を差し掛ける黒人、荷物を運ぶ商人、武士、茶人、見物する女達など、さらには天主堂まで描かれている。荷物の中には、象、ラクダ、クジャクなど珍奇なものも多く見られる。

ここからは、はじめて見る珍しい文物に興味

しんしんの当時の人々の興奮が伝わってくる。

そんな好奇心を全開にして南蛮人を受入れたのが織田信長である。かれは比叡山を焼き打ちにして数千人の僧侶たちを焼き殺したのをはじめ、一向一揆を殲滅して女子供を含む住民数万人を皆殺しにするなど既存の仏教勢力を容赦なく排除した。その反動か、かれはキリシタンの宣教師を受入れ、京都に教会やセミナリオ（神学小学校）の建設を許したほか、安土には敷地まで与えて天主堂とセミナリオを建設させた。

信長は宣教師を安土城に繰返し呼んで、彼らの語る珍しい話に熱心に耳を傾けた。彼らの話を通して世界を理解しようとしたのである。そして彼は日本とは異なる常識をもって世界を股にかけて躍動している国々があることを知った。こうして培われた彼の世界観が従来の常識とはかけ離れた数々の異常行動を生んだのである。

黒人奴隷をもらい受けて自分の行列の最先端を歩かせたり、フェルトの帽子をかぶったり、自分の特異性を際立たせるために存分に南蛮文化を利用しただけではない。ポルトガル人のもたらした最新の技術、地球や宇宙に関する広い知識に共鳴し受入れた。1543年種子島に漂着した3人のポルトガル人がもたらした鉄砲をいち早く量産し、大量に購入して、自らの戦術に組み入れたのが信長であった。鉄砲伝来の32年後の1575年、「長篠の合戦」で無敵といわれた武田の騎馬軍団を下したのは、3千挺の鉄砲を足軽に持たせて自在に操った信長であった。西洋伝来の新兵器が日本の長い戦国時代に終止符を打つ可能性を秘めていることをいち早く見抜いたことが勝利の鍵であった。

一方、信長のもとでキリスト教の布教は着々と進められていった。彼らはセミナリオを建て、教師を育て、さらに布教を進めるという組織的な布教活動が功を奏して一時は日本中に信者が70万人に達するという状況が生れていた。またキリシタン大名が誕生し、1582年には九州のキリシタン三大名の少年遣欧使節団がローマ法王庁を目指して船出した。3年後にローマに着いた一行は布教の大成功を示すものとして、ローマでは民衆の大歓迎をうけ、盛大な式典の中、ローマ法王に謁見することができた。日本での

布教は前途洋々たるものに見えた。しかし、実は彼らの船出の半年後にその最大の保護者であった信長が本能寺の変に斃れていたのである。

秀吉の妄想

信長のあとを嗣いだ秀吉は南蛮貿易の利益を充分理解しており、長崎を直轄領にして貿易による利益を独占しようとした。

1589年には、薩摩半島の片瀬に異国船が着岸したと知ると、ただちに石田三成に銀子2万枚を持たせて派遣し、舶載してきた絹糸を買い占めさせた。絹の輸入が莫大な利益を生むことを知っていたからである。

つまり、信長は貿易も布教も受入れたのに対し、秀吉は貿易は拡大したいが、キリシタンに対しては懐疑的であった。

1596年土佐に漂着したスペインのサン・フェリペ号の水先案内人フランシスコ・デ・サンダがスペインの領土が広いことを自慢し、その理由として宣教師を派遣してその国人にキリスト教を伝えておき、信者が充分の数になってから軍隊を指し向けて国土を征服するとのべた。

これを聞いてキリシタンの危険性を確信した秀吉は「26聖人の殉教」といわれるキリシタンの大弾圧を行った。貿易と布教、この二つをいかにして処理すべきか、悩ましい問題であった。

秀吉は、信長を通して世界を理解した。しかし、日本を統一すると彼の野心は肥大化した。つまり世界と自己の力の差を知らず、誇大妄想的に朝鮮への遠征という侵略戦争「文禄の役」へと発展していった。妄想はさらに拡大し、明、台湾、マニラにまで兵を進めると公言し、威嚇的な外交を展開した。展望なき領土拡大欲の暴走であった。

② 徳川家康の貿易政策に見る逡巡

それに対し、家康のスタンスは少し異なるものがあつた。

文禄の役でも、秀吉の要求に従って九州まで出陣したにもかかわらず海を渡ることはなかった。家康は秀吉の妄想を醒めた目で見えていた。

家康は貿易には早くから関心を寄せていた。

秀吉が朝鮮、明のみならず台湾、マニラなどに対し侵略をちらつかせながら威嚇的な態度で接したのに対し、家康は秀吉によって傷つけられた関係を修復し、周辺諸国と友好的な関係を樹立して、商人に朱印状を与えて貿易を管理した。朱印状は30年ほどの間に三百数十通も発行されたから、これに従事した豪商たちは大きな利益をあげ、幕府に協力した。家康は貿易の利点を十分理解していたのである。

朱印船は、アジア各地で大活躍し、利益を日本人が独占するまでに成長し、このためポルトガル、スペイン、オランダにとっては大打撃であった。また、アジア各地に日本人町が栄え、多くの日本人が居住した。当初は西国諸藩の大名も朱印船を出して利益を追求したが、家康は、外様大名の締めつけを強め、大名の朱印船貿易を制限し、やがては大船禁止令をだして、船を取り上げてしまった。この当時の輸入品の最大のものが鹿皮、絹糸、砂糖、おしろいであった。なかでも鹿皮は1年で30万枚、40万枚も輸入され、羽織、袴、足袋などに活用された。

1600年日本にはじめてオランダ船リーフデ号が漂着した。家康が乗組員のイギリス人ウィリアム・アダムスを引見したのは、関ヶ原の合戦の直前、まだ秀吉の死後、五奉行の一人として大坂城に滞在中のことであった。家康はアダムスから世界情勢を聞き取るため、話が夜中まで続くこともあった。

ポルトガル、スペインとの交渉に悩まされていた家康にとって新興勢力イギリス、オランダは新たな可能性を感じさせるものがあつた。関ヶ原の合戦が終わって、家康の覇権が確立すると、すぐにイギリス人ウィリアム・アダムスとオランダ人ヤン・ヨーステンを江戸に招いて、海外の諸事情を熱心に訊ねている。このとき初めてキリスト教に新旧の違いがあり、互いに激しく争っていることを知った。家康は彼らを優遇した。アダムスは特に信頼され、三浦に250石の領地を賜っている。ヤン・ヨーステンも毎年100石の知行を支給されている。家康は彼らの広い知識に興味を持って学ぼうとしたばかりか、アダムスには船の建造を命じている。家康は、西洋風の造船技術を学ぼうとしたのである。

彼が建造した船は後に太平洋を往復している。彼らの知識を通して家康は世界を理解したのである。

家康は一応キリスト教を禁止していたものの当初から過度の弾圧をしていたわけではない。禁止に転じたのは、1612年の「岡本大八事件」という幕臣がからんだ贈収賄事件をきっかけにして、幕府の内部、さらに大奥にまでキリシタンが深く浸透していることが分かってからである。翌年、家康は金地院崇伝に「伴天連追放令」を起草させ、キリシタン大名の高山右近をはじめ各地の宣教師、キリシタンを一斉に逮捕、長崎へ連行し、その翌年三艘のポルトガル船に乗せてマニラへ追放した。「大坂冬の陣」の直前であった。しかし、家康は宣教師や信者の血を流すことはなかった。

家康はどちらかというと貿易の利点に目を向けていた。彼は、国内のみならず周辺諸国へ目配りするだけの世界観をもっていた。アダムスやヨーステンを近くに置いて意見をきいたのも、世界と友好的な関係を築いて貿易を拡大することが利益になると考えていたからである。こうした貿易に積極的に活躍した茶屋四郎次郎などの豪商を身近に置いて貿易政策に対して助言を得ていた。

家康には、貿易と禁教のバランスを考える余裕があった。

③ 秀忠と家光の鎖国への道

家康は将軍になっても2年後には秀忠にその地位を譲って駿府に引っ込んでしまった。このため、これから10年ほど、大御所としての家康と、将軍としての秀忠の二元政治が続く。家康は主として外交を、秀忠は江戸で主として内政を担当した。家康は外人や豪商、僧侶など経験豊かな人材をブレーンとして近くに集め、広い視野のもとで対外政策を構想した。

しかし、家康が死ぬと、残された秀忠は世界を見る目を持たないまま、諸々の課題に直面させられた。家康としては、政策路線は全て自分が敷くから、あとの者はその延長線の上を進めばよいと考えていた。そのため無能な将軍でも誤ることのないよう、取り巻きの官僚組織を固

めた。しかし秀忠には二代目の引け目からか、強さを誇示するため虚勢を張る傾向があった。福島正則を改易したのはその一例であり、いわゆる「強きご政務」を進めた。

キリシタン政策にこれが典型的にあらわれた。キリシタンの探索、摘発、取り調べ、処分が容赦なく進められた。宣教師の殉教が始まると、日本への布教と殉教というヒロイズムに血を沸かせる宣教師が死を決してつぎつぎに日本に潜入し、ついに潜入と弾圧の悪循環に陥った。こうして1622年の「元和の大殉教」へと一直線に進んでいった。その日は長崎に集められていた各地の宣教師、信者、彼らをかくまったものなど老若男女55人が一度に火刑に処せられた。

これ以降、全国でキリシタンの摘発がきびしく進められ、ありとあらゆる拷問が考え出されて、背教をせまり、聞き入れないものは容赦なく酷刑に処した。しかし、こうした弾圧はますますマカオやマニラから宣教師の潜入を引き起こし、キリシタン追放の1615年から毎年鎖国直前まで30数年、潜入宣教師の殉教は75人にも及んだ。

この間にも、朱印船に紛れて宣教師が潜入する事件があり、朱印船に対する風当たりも強くなり、次第に朱印状の発行が抑制され、ついには朱印船も廃止されてしまった。特権的な豪商も朱印船を出すことが出来なくなった。外国ではオランダと中国のみが許され、オランダは長崎の出島にのみ居住をゆるされ、完全に管理下に置かれた。

鎖国令は一度に出されたわけではない。まず宣教師の追放、外国商人の滞在禁止、ポルトガル人の退去命令、日本人の出入国禁止、日本船の海外出国禁止、と段階的に発布され、ついに1641年全面的な鎖国へと至ったのである。

こうした経過を見てゆくと、秀忠も家光も貿易の拡大を考えた形跡がない。一方的にキリシタンを弾圧している。それが世界と日本にとっていかなる意味をもっているのかを考えた形跡がない。そこには自分の頭で考えることをせず、先代の敷いた路線を御都合主義的に曲解してはばからない傲慢な二代目の姿しかうかがえない。しかも、キリシタン弾圧は年をおって強

化された。組織論的にいえば、過剰学習、過剰適応という現象とみられる。二代目、三代目の将軍がそうであるから、幕府の顔色を伺う大名たちは、それ以上に幕府に媚びへつらう傾向を見せ、偏執狂的にキリシタン狩りを進めた。

それが次なる悲劇「島原の乱」の引金になったのである。

「島原の乱」とその影響

島原の乱については、古来、土一揆あるいは百姓一揆という経済闘争的側面を強調する見解と、キリシタン一揆という宗教的側面を重視する意見が相半ばしている。両側面が複雑に作用していて、どちらか一方に決めつけるのは無理であろう。我々はこうした見方を横に置いて、これを組織論の視点から、組織の形成・代替わり期における過剰適応の事例として検討してみたいと思う。

この乱は今日まで一般に「島原の乱」と呼ばれてきたが、近年「島原天草一揆」という呼称が提唱されている。確かにこの事件の舞台は島原と天草という異なる地域の住民が同時に決起し合流して大勢力になったものである。島原と天草は隣接しているが、海峡を隔てており、しかも島原は幕府の直轄地、天草は遠く離れた唐津藩の飛地という異なる国であり、明治以降も島原は長崎県、天草は熊本県という具合に異なる行政区分になっている。当然、島原と天草は異なる領主のもとで異なる行政が行われていたわけで、この両地域が同時に決起し、家族もろとも合計3万人という住民が幕府軍を相手に籠城し全員命を捨てるという大事件に至ったことを見れば、その原因は、この地域の特殊事情のみならず、当時の幕府におけるより根源的な原因、つまり幕藩体制形成期における組織固有の原因を検討しなければならない。

この乱から70年ほど前に島原と天草でキリスト教の布教が始まり、30年ほど前まで、キリシタン大名のもと、宣教師は自由に活動し、住民の多くがキリシタンに改宗して穏やかに暮らしていた。日本におけるキリシタンの最盛期であり、さらにこの地域は日本におけるキリシタンの中心地でもあった。島原を支配していたのが

有馬晴信、天草を支配していたのが小西行長であり、ともにキリシタン大名であった。小西行長は関ヶ原の合戦で石田三成の西軍に加担したため、戦後四条河原で打ち首になった。しかし、秀吉の時代から徳川の世になり、キリシタンが禁止されて30余年の月日がたつと、すでにほとんどのキリシタンが心ならずも棄教させられていた。しかも、家光の代になると取り締まりは日に日にきびしさを増した。同時にこのころ凶作が続いたにもかかわらず、年貢の取り立てが極端に厳しくなった。特に島原においてはキリシタンの取り調べに続いて年貢の取り立てに過酷な拷問をもって臨んだ。たとえば、身体を蓑で包み火を付けて苦しむ様子をおもしろがって蓑踊りと称したり、糞尿をためた穴に死ぬまで逆さ吊りにしたり、と考えられるかぎりの残酷な手段が編み出された。

大百姓の一人、与左衛門に対する取り立てが行われた。米をさらに30俵出せというものだった。しかし、もはや一粒も残っていなかった。出さないのなら水攻めだ、と若い息子の嫁を引きだして籠に入れ、川に浸けた。嫁は臨月だったが、それを昼夜六日間川に浸けっぱなしにし、六日目に出産したが、母子ともに水死した。

この頃すでに村には食料はなく、百姓は草や木の根を食べてやっと生きのびている状態だった。

こうした状況に置かれて島原の百姓達はいつに立ち上がった。彼らの思いは「大勢がゆっくりと殺されるより、一度に死のう」というものであった。

このころ天草四郎という少年が現われ、数々の奇跡を表した。これをきっかけにして、それまで棄教していた元キリシタン達が次々にキリシタンに立ち返った。それとほぼ同時に天草でも武器をとって決起し、瞬く間に数千の大軍勢になり、領主の城を攻め落とす勢いを見せた。しかし、幕府が各藩に出動を命ずるに及んで、一揆勢は原城へと立てこもることになった。一揆勢はほとんどが一家をあげて参加しており、城内は約3万人、その半数は女・子どもであった。島原でも天草でも、村をあげて一人残らず一揆に参加するほどの状況であった。

一揆勢はよく闘い、12万という幕府の大軍に

包围されながら3ヶ月間もちこたえた。幕府は当初派遣した板倉重昌が戦死し、二人目として筆頭老中松平伊豆守信綱、別名「智恵伊豆」が派遣され、兵糧攻めに入った。幕府は一揆勢の食料がつき、戦闘能力がなくなるのを待って突入し、籠城した一揆勢3万人をことごとく虐殺した。

江戸時代には多くの一揆が発生したが、だいたい首謀者が処分されるだけで、参加した百姓が殺されることはなかった。しかし、この乱のような残酷な処分は、信長を除いて日本史上に例を見ないものであった。

島原と天草で年貢の行き過ぎた取り立てが行われたのは、領主が幕府におもねって、江戸城の普請にあたって4万石の実収のところを10万石相当の負担を願ひ出で、そのつけを全て領民に押しつけたためであった。ここにも領主の保身のための過剰適応の例を見ることができる。この状況は天草も同様であった。

この乱は家光の独裁が始まって5年目に起こっており、家光の代になって一段と厳しくなったキリシタン取り締まりが原因の一端であり、同時に幕府におもねる大名の過剰な年貢の取り立てが引き金になったものである。それは、秀忠、家光と代を追うごとに將軍自身の過剰適応が進行した状況を反映したものであった。

乱の後、幕府は原因を究明して、島原の領主松倉勝家を打ち首にしている。武士に対する刑罰は切腹が原則であるが、大名に対して打ち首ということは幕府がよほど勝家の罪を重いと考えた証拠である。ここに幕府の、この事件に対する姿勢がはっきりと見てとれる。乱以前の過酷な年貢の取り立てと併せてこの時代の行き過ぎた統治を幕府が認めたことになる。しかし、幕府は公式に圧政が原因だったとは言わない。むしろ、原因はキリシタンにあるとして、この事件をきっかけとして、キリシタン禁止を徹底していった。このあと「寺請制度」「宗門改め人別帳」という全国民の思想・信条の管理を寺院にゆだね、さらに相互監視させる制度へと進んでいった。これが鎖国制度の国内的側面として完成した姿であり、江戸時代二百数十年間、人々の上に重くのしかかる制度であった。ザビ

エルによる布教の開始(1549年)から島原の乱(1637〜38年)まで88年目にしてこの時代の日本におけるキリスト教の歴史は終止符を打つのだが、キリスト教に対する過剰な嫌悪感と警戒心のみが二百数十年の間生き続けた。このため「見ざる・聞かざる・言わざる」が庶民の智恵となり、性格となってしまった。日本人がいまだに自分の思想信条を明快に語ることを苦手とし、政治家の能力が諸外国に比べて極端に劣るのは、この時代の影響が今日まで残っているからではないか。

また、キリシタンを極端に恐れる風潮が明治初年まで根深く残っていたことは、本論文の初めに「かくれキリシタンの受難」の項で述べた通りである。

二代目三代目のこの過剰でヒステリックな適応行動が江戸時代のひいては近代日本人の性格をゆがめたのではないだろうか。

春、それはものみな蘇る季節である。組織もまたこのとき甦る。

「組織の適応モデル」によれば、組織のかかわる環境を一新し、新しい常識のもとで、新秩序を建設し、組織の再生に努める局面が組織の春である。そして組織の蘇りを図ろうとするこの春の局面において、最も重要な課題は復古派の抵抗を排していかに速やかに新しい秩序を建設するかである。

したがって、江戸時代の春を捉えるに当たって、われわれは新しく覇権を握った徳川家康、そして秀忠、家光が長期の安定した平和な社会を創造し維持するために、1.豊臣秀吉の系累、2.改易等によって急増した浪人、3.朝廷、4.キリシタン、といった抵抗勢力とどう闘って、それらの力を殺いでいったかを検討してきた。それによると、江戸時代の春は開幕の1603年から島原の乱を経て、鎖国が完成し、家光が亡くなり、由比正雪の乱が起きて、幕府の政策も武断主義から文治主義へと舵を切った1651年までといっていよう。

「改革には痛みがともなう」とはよく聴くセリフだが、この江戸時代の春の検討を通して、そうした生やさしいセリフ以上に、「再生には、

策謀と暴力そして血と涙がともなう」ことが実感された。その再生には、常識の速やかで大きな転換が必要であったことを思えば致し方なかったのではないか。それよりもここで注目すべきは、古い秩序の破壊には暴力が必要であることは当然としても、新しい秩序の建設にも暴力が必要なことである。

その上、そうした再生には、家康に見るようにリーダーの確たる展望と揺るぎなき意志が不可欠であることも実感された。とは言え、そうしたリーダーの要件は、破壊を旨とする組織の冬においてよりも建設を旨とする組織の春においてこそ、求められるものであろう（展望なき破壊は歴史上いくらかもある）。

そこで織田信長である。彼は「鳴かぬなら殺してしまえ ホトトギス」と世にうたわれている。巷間こう伝えられる信長には“確たる展望”を細心の注意を払って一步一步実現しようとする“揺るぎなき意志”が感じられない。つまり、彼は建設者としては失格者と言わざるを得ない。したがって、信長と家康をそれぞれ、旧体制の破壊者と新体制の建設者と特徴づけるのが妥当であろう。

それはともかく、3.11の東日本大震災を機に、社会の大転換が迫られている。信長ならぬ自然による大破壊から日本は復興しなければならない。平成の家康はいずこに……？

なお、組織の適応モデルでは明らかに「復古派」とすべき人々を江戸時代の春の記述においては「抵抗勢力」と呼称している。これは、特に朝廷やキリシタンは「復古派」とは言い難いと思うからである。さらに、政治や社会体制は権力の交替によって、ドラスティックに変貌するが、文化、芸術の分野では（組織の適応モデルによれば）生じたであろう「カルチャーとサブカルチャーの交替」がこの稿ではさほど明確ではなかった。これは権力は文化や芸術の分野にはなかなか及び難いことを暗示しているのかもしれない。

いずれにしてもこれらのことは「現実には理論より豊富で複雑である」ということを示唆しているのだろう。

（イラスト：坂田融）

〔参考文献〕

- 今谷明（1993）『武家と天皇』岩波新書
 岩生成一（1974）『鎖国』日本の歴史14，中公文庫
 大石慎三郎（1977）『江戸時代』中公新書
 大橋幸泰（2008）『検証島原天草一揆』歴史文化ライブラリー259 吉川弘文館
 岡田彰雄（1960）『天草時貞』吉川弘文館
 神田千里（2005）『島原の乱』中公新書
 熊倉功夫（1982）『後水尾院』朝日新聞社
 河野元昭（1976）『尾形光琳』日本美術絵画全集17，集英社
 司馬遼太郎（1987）『島原・天草の諸道』街道をゆく17，朝日文庫
 藤井譲治（1997）『徳川家光』人物叢書，吉川弘文館
 古田亮（2010）『俵屋宗達』平凡社新書
 山本博文（1999）『徳川将軍と天皇』中公文庫